

学級集団の指導

足利市立毛野中学校 岡田 明 男

子供はいつも遊び話し、仕事をしている。その1つ1つについてみても、その内には、いろいろの問題がある。その問題が子供の問題であれば、子供個人にも原因があり、家庭に帰れば家庭での問題がある。学級においてもいろいろと問題がある。それらの問題は切り離すことは難しい。しかしここでは学級集団の指導というものについて考えてみたい。私を学級集団の指導という研究に入らせた動機は、始めて学級担任となつたときにある。学校を出て教職について1年間は学級の担任はなく現在の担任学年の子供達を担任外として見てきた。そのときは、私だら、あの子供を、この子供を、こういうふう指導するかと考えたこともあつた。だが、現実に傍観的にしかみていなかつた私が、それらの子の担任になつたとき当惑した。その当惑する問題の子には、個人的なものについては、個人指導をなした。社会集団としての個人全般についてのことについては、全体的指導をした。だが、ここで学級集団の中にある個々の主体的立場から、常に集団とのつながりにおいて正しい問題解決ができるように育成していく必要が感じられる。いうなれば、常に教師は、生徒に対し学校集団または学級集団の中における自分のあり方を正しくは握し、行動する生徒できごとに対しては、そのことの善悪を判断し、また学級仲間と一緒に考えていける生徒であつてほしいと思う。それには、いつも教師は学級のできごとについて知っておく必要がある。できごとが生じたときには、その内容においては、学級の問題としてとりあげ、学級の仲間全員で問題解決に當つていくことを習慣として身につけさせるように指導していくべきである。それには実践の場として学級集団の指導がいかに大切かがわかる。そこで私の学級経営の目的は、個人個人が自由に自己を語ることに、すなわち教師からみたときその学級集団の中には、上下の階級関係はなく、学級内がむつまじくなごやかである横の関係の育成をめざし、互いに助けあふべき仲間として人間関係を高め力強く生きていくことを目標とした。だが、その学級目標達成には、いろいろの困難があることは当然である。例えば、中学校の組織、教科時間、場所等がある。それらの問題は、解決が難しい。しかし私の学級のやつてきたことが、決して良いものであるとはいわないが、たゞ問題解決のために協力し努力している集団であることを記してみたい。

生活改善に積極的に協力する

学期早々音楽室に新しい机が入った。前の机は、それはひどいものであつた。その新しい机で勉強するうちに、またまもない時に、私の学級の幾人かの生徒が机の上を、ナイフで傷をつけたのである。音楽の先生より苦言をいれたとき、傷つけたのが誰か調べて、注意してほしいということになつた。その話を聞いたとき、私の脳裏に、そのようないたずらをした者は、だれとだれなどだなどびんときた。しかし私の先入観から呼び寄せ「君だね、音楽の机の上にナイフで傷つけたのは。」ということになつた。もしその子が傷つけなかつたとしたら、「先生はいつも僕ばかり疑う」といつてふくれるに違いない。

し、やつたとしても素直に認める子供ではない。たとえ認めても他の子が同じ様なことをなすに相違ない。それには学級の全体の問題として、とりあげる必要を感じた。また先入観は教育効果を高めるどころかマイナスであるという観点からも学級の問題として指導した。帰りのH-Rのときこの問題をとりあげた。「今日、音楽の時間があつたね。それから音楽の先生が、私のところに来て、新調の机の上に傷がたくさんナイフでつけられてあつたというわけなのだ。決して皆を疑うわけではないが、昨日先生が帰りにカギをかけて帰つたのだよ。そして今朝第1時間目が皆の授業だったというわけなのだよ。すると当然君達に嫌疑が、かゝるわけだが、全員がしたわけではないだろうから正直に傷つけた人は申し出てもらいたい。」と私が話した。「だれだやつたのは」という声が生徒の内から聞えた。そこでは、傷つけない者の怒つた声があちこちから起つた。そこで私は、「傷つけた人はまちがってつけたのだよ。それとも授業がおもしろくなってつけたのかもしれないね。やりそうなことだよ。音楽室の机にかぎらず皆の机に新しい傷はないかね。」と話しても「私か。」という者は無かつた。「困つたね、机を傷つけた人がいないとは。」という、私の思案顔をみて男子の幾人かが、「今朝座つた通りにすれば、わかるじゃないか」と「それがいい」という声がかゝつた。「じゃ疑うようだがその様にするか」ということで、音楽室にいき今朝座つた通りに座つた。すると赤面した幾人かの顔を見た。その場には音楽の先生にもいてもらった。赤面した子供達の机の上をみると、新しい机の上にナイフで野球のマークなど刻みこんであつた。単純ないたずらとしてすませば、すむが皆で考えることも必要とかんじ少々話し合いをとつた。話し合いをとることにしても反対の者もないわけではなかつた。室外では掃除にきた1年の生徒が騒いでいるのをきくにつけ早く帰りた気持もあるからだろう。どうしたらこういう様なことがなくなるだろうということについては、罰則論のみとび出し「1週間掃除がいいや。」「1週間朝の掃除といつても、さぼつていりや同じだよ。」「監督する人がいればやるよ。」「だれが監督する。」……だれも次の言葉がなかつた。するとしばらくしてひょうきんな者が「おれがやるよ」というと皆笑つた。「オール遅刻のくせに」…全員がどつと笑つた。結局結論は、でなかつた。だが、時間が延びていつた。これ位のことでとも感じ物を大切にすゝる気持を持つてくれればと思ひながらも、「このように傷ついた机をまだまだ多くの人が使うし、その人達がノートするときにはその凸凹で迷惑するね。だれだつて汚れた机に坐るかね。新しいところがいいね。今後音楽室であれ学校のもの何であれ大事にしよう。早引きしたM君にも私から話そう。それから傷つけた幾人かの者についても注意してもらい皆も責めないで、皆自身も考えて行動して下さい。それから外にまたされていた1年生の掃除もやつて下さいということによりこの問題は一応解決したようだが、学期も改まつてまたもや運動会も近づくとする頃、類似した問題が起つた。そのできごとは級の者によつてなされたのか、どうか、わからないが、その頃はやつていた空手チョップにより各級のドアがよくこわされていた。その例にもれず、ドアの板が割れていた。学級で話し合いとにかくなおそうということになり男子全員がこわれた個所を修繕し女子はカーテンつけをした。仕事を通しこわすことの安易さより修繕していくことを通して学び得たことがあるだろうと思ひ、解決への意欲もでてきたといえるが、量的にも物をこわしたり乱暴にすることは少なくなつていつたようだ。しかしなぜかなくなるならない。それは私の指導性の欠如と熱意の不足ということに考へている。

真理や真実を探求する

人間行動の美しさをつかませる

朝のHRでは多くの教師は、まず最初に出席をとり、かつ生徒の健康状態の観察をするに違いない。その1人でありそのことがまた楽しい日課の始めとなるのだ。この頃なんとなくゆううつを感じ、それは余りにも多くの欠席者と早引者の多いことだ。私の勤務している中学校の地域は、農村と都市の混在するところで父兄の職業も、農業とそれ以外の職業で半々である。そして農繁期が地域ごとに、すなわち部落により別々にくることだ。それは水田の水による。北から南へと農繁期がずれてくるのだ。北の農繁には、その地域の生徒はやすむか早引きする。そして1日中仕事に励げみ夜遅くまで働き続ける。水が配布される日がきめられその日までに田植えをしないと水は次の部落に廻わされてしまうのだから働ける者は働くことになり人手のない家では、中学生はそのよき労働力とされる。そして田植えが、完了すると、生徒は疲れた体で登校し、そして次に水のいく部落の生徒は早引、欠席ということになるのだ。それでも近年は少なくなりつつあるそうだと同僚の先生達は言っている。先生達は疲れてだつくりしているようで元気がない。そして出席簿には欠席のしるしが次々とマークされていく。それから「先生早引きです」「早引きです」と多くの生徒が、生徒手帳を持参してくる。朝のHRには、座席が、がらんとし、さびしい感じがする。今日も、出席をとつていくと、この時間以上来てないS君を呼ぶと、近所の生徒が、「欠席です。」といった。私自身彼の欠席の理由がわかっていたが、その生徒の次の発言には驚いた。「先生、Sの家は、お父さんが気が違つて家を焼けたんだつて、そしてお父さんは病院に車でつれてかれたんだよ。そしてまだ田植えの用意が出来ておらずこれから先も休むだんべ」といい、それを聞いていた生徒が、「ゆうべの火事はそいつだ。」「ゆうべ、おれは火事みにいったよ。」「消防車が大層集まつたけ。」……などと、いろいろの話を、するのが聞え、そこで生徒によくきくと、父が発狂し、家に火をつけたとのことで、それ大変だと思ひ、その日の授業の終了後、S君の家を訪問した。Sは、家のまわりの棒や竹などを、お母さんと整理しており、私を見て驚いた。Sやお母さんは、私の処に来て、「迷惑をかけて、すみません」と「先生一層学校へ、いきずらくなつちやつた。お父さんがこんな有様で。」という言葉聞きながら、子の顔を見ていると、青白いひ弱い顔が一層青白く暗いんえいを持つようであつた。私はそのとつとつと聞いて、Sをはげましたらよいかまごつた。たゞ「こんなことでくぢけるんじゃないよ。しつこく勉強な。勉強は少々遅れても、学校へ早く来られるようにして、登校したらがんばるんだ。」という言葉を言はなかつた。お母さんはとどめなく暗い家の歴史を話し聞かせた。その結末はいずれにせよ打ち込みようがないものだつた。せめてお父さんが病院に入つてくれて、それに火事が広がらなくて済んだことをくり返すのみであつた。家は荒れてはいるが旧家のおもかげを残しているが、周囲は新築みだれ、また土間には脱穀のすまない麦が積まれてあり私は本当にボヤだけでよかつた。この麦の家の煙でもあるしと感じて帰つた。翌日の朝のHRにも勿論Sは顔を見せなかつた。又今日も4〜5人の欠席者がいた。そしてそれらの欠席者の家の状況を聞くと、「彼の家は大体終えたからあすあたりに帰るべ。」「あれの家は今一番忙しい所だよ。」などというのである。私はふと「皆が一堂にそろうには何日かゝるかな。」という、皆口をつぐむのだ。「農繁つて大変だね。」という「先生なんか、百

姓じゃねえから、おれ達のことわかんなかんべ。」「ひどく疲れるんだ。」すると他の生徒「農業のど
んなか宿題だしたつて、できねえよ。」「だいちつかれてだめだよな。」という声も聞えた。いちいちも
つともな様な気がした。するとS君の家の近くの子が、「Sの家なんか、小麦の脱穀もすんでねえし、
お父さんは病院だし、姉弟で田植えをするのに耕したり水を入れるのに大変だよ。」「S君は弱いしね。」
と女の子が話し「Sの家、大変だなあ」という男の子の声もした。「どうにか、ならねえかな。」Sの家
の稲苗は、こんなに低くつて、分けつもしてねえで」と身ぶりして話す近所の子の話に、出席をとつた
私も、他の子も、だまつて聞きほれてしまった。「それから彼の家、牛も馬もいねんだ、借りることも出来
ねんだんべ。姉や彼と小さい兄弟で、よくねい万能などで耕しているよ。あれじゃ、時間くうもの大変だ
よ。」私はその話の様子は大体家庭訪問のとき、あらまし知っていた。そこで生徒の幾人かによつて「手
伝いしましょう。」ということになった。すると「おれもいくよ。」「私も」「先生私もいく。」ということに
なり級の多数がS君の家に手伝いに行くということに決まつた。そのとき私は「そこでS君、皆が手伝
いに来てくれたこと喜ぶかな。やがるんじやないかな。」と私がいうと、生徒の多くは、だまりこんだが
やがて「大丈夫だよ。困まつてるときは、おたがいでもんね。」他の生徒も「そうだ」「そうだ」とかいつ
て、仕事を助けに行くことについての喜びの顔をみせた。私はそこで「手伝いに行くといつても、皆の
家自体が忙しい人もあるはずだ、家のことを放り出して手伝つてもらつてS君喜ぶはずはないよ。だが
ら参加は自由ということがよいと思うが。」と話した。勿論生徒のみにまかせておけることでもないの
で私も出かけていつた。参加したものは、23人で大多数は農の経験のない者が多かつた。ふいにいつ
たためかS君の家には、誰れもおらず田にいくと麦の刈跡に水が入れてあつても、耕起してなく、そ
を姉弟で耕がやし始めているところであつた。お母さんはお父さんの付そいで留守とのことで、皆「手
伝いにきたよ」というと、始めはずかしげであつたが、やがてS君も同化しうちとけあい、話し始めた。
持参した農具、借物の農具で耕してもその量はたかがしれており仕事は、はかどりがたかつた。その中に
いた農家のG子やT子の家の牛をつれてくることになつた。G子やT子と幾人かの男子がついて借り
にいつた。そのときS君を始めお姉さんにしてみれば、ただでは、借りられないしと思つたのだから、
ことわつた。しかし他の子達は、Sの心の中を察してか、こんなことでは、何時間やつても、たかどしれ
てるよといふ「おい借りてこいよ」といふ借りにいかせた。G子の家は、使用中。結局、T子の家の牛
をつれてきて、女生徒が鼻どりをし、男子が後ろよりいくという協力ぶりをみせた。他の万能やくわの
者達は、泥ばねをあげながら、一生懸命仕事をした。農家でないI君、F君、K君、W君など服は、学校
帰りであるので、まくつて仕事はしたものの、泥と水がはね、どろんこになり汗をふくと顔まで真黒な
り皆で笑うのだつた。女子の一部は苗をとり運び、作業は一段と早まつた。たゞお百姓さんのように上
手でないが一応耕しおわり、田植えが出来るようになり全員で話しながらも一応は終した。その頃は
日も暗くなりもう他の田には人の影も少なくなつていた。そのとき皆が「K君怒られるぜ。今日夕刊
どうしたんだつていわれるぜ。」といふとKは「たまにだも、しやねいや。」というのみだつた。そこ
には笑い顔の中に喜びと誇りが満ちているように私は感じた。仕事は終り皆それぞれに「御苦労さん」と
いい合いながら帰つていつた。後日S君のお母さんから感謝の手紙が来た。この問題を通して、助け合
おうという言葉に教へるより現実級の中にその雰囲気を作り、自主的に協力し合う気風が男女の差な
く続いていくようになればと思つている。次の例は1人の精神薄弱児をめぐつての問題である。あと

で、夏休みを迎えようとする日のこと、その日のHRの時間は、少々長くて50分かつた。普段健康状態に異状のないこの子も、長いHRとその前の清掃の時間が継続していたので、便所にいけなかつたのかもしれない。そのため小便を漏らしてしまつたのである。この子は女子で座席も、1番前で、人と口をきくことも少なく、いつも1人である。夏休みを前にしての最後のHRであつたから長びき、「先生便所にいつてもいいですか。」と言えなかつたのだらうし、私自身も、顔色をみて判断できなかつたことは、遺憾であつたと思う。このS子の周囲に坐つている子供達から、「先生小便だ。」「Sが」私に、まさか中学生も、2年生位になつては、この様なことは、ないだらうと思つていたし体の悪いときには、遠慮することなく、行くことを指導してきたつもりだから、一時なんの手の下しようもなく、呆然自失のほどであつた。しかし、生徒達の騒ぎ、机を寄せる音、話し声により、私の呆然としていた顔が、いかにこのまゝではと、脳裏をかすめた。騒いでいるOやその一連の男子、女子の騒ぎをしずめ、「人には、体の調子の悪いこともあるものだ。その欠点をとりあげ、嘲笑し蔑む人間こそ、軽蔑するに値する人間だ。さあ友達が困まつている時は、お互いさまた。」といい、私は上衣をぬぎ、雑布をもちS子の処へいつた。S子は騒がれて泣き出したので、「さあ早く家にお帰り」というと帰つていつた。まわりの机、いすは、とうにどかさされて、環状になり私の様子に生徒達の目が注がれていた。「バケツを」というと、環状になつていた生徒の中から「バケツだ」と叫ぶ声が聞え、すぐにもつてきた。私は、乾いた雑布を、大掃除に使用したばかりでゆすいであつた雑布を、小便の中に入れ、しみこませ吸いとるのみで、女子ばかりでなく、男子も何ものかに打たれたのだらう。女子は、いち早く幾人かの者は、残りのバケツに水を汲み持参し、雑布をもつてきて私と一緒に汲み上げをなした。すると男子も、何を思つたかデツプランを階下から持つてきた。十分位のうちにまたたくまに、もと通りになり静かさに戻つた。よこした雑布は幾人かの女子と、よく洗いとどおりに戻した。みていたO君らは「この次から使いにくいな」などといひ、皆も笑つた。しかし「この次」という言葉こそ、掃除前の笑いと異なつた笑いであつた。事実彼ら自身その清掃に参加し、拭きとつたのであるから、女子の方が協力的であつた。特にこのとき女子でも卒先協力し皆をリードし、もくもくと行動した級の委員長でもあつたHの行動が、全員の心に伝播するものがあり、全員が協力することになつたと思つている。こゝで、2つのこと、S君の手伝ひ、S子の小便ということ、この2人の交友関係成績の違いは、どうであれ同じ室で生活してゐるということ、級の者全員にながりを持つている学級の中においても、まともがたい男の子も、いつも小さなグループをつくり競争意識の強い女子も、1つの目標をもつてゐる幸せ、であらうといふのである。ささいなことで争う者も、2、3日休むと心配し「どうしたんだらう」という。1人1人その胸の中には、友のことをまじめに考え、積極的に意見を述べ学級をリードし、人の意見を聞きいくことにより、実践的協同作業も、うまくいくことを望み、今後も、伸ばしていきたいと思う。

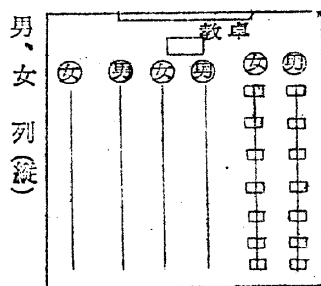
民主的生活態度をしつかり身につけさせる

4月に座席は、特別に身体的欠陥ある者を考慮し、あとは身長と座高に依り席をきめた。しかし、しばしばして5月の中旬、幾人かの女生徒がきて「先生、席をとりかえて下さい。」と申し出た。「なぜだい」と聞くと「だって、先生、N君とておいじわるなんです」「いじわるつて、具体的にはどういうことかい。」と先生、私の物を借りるときなど、おせいじやおべつかを使つて、かせやなというの。しかし返すときは

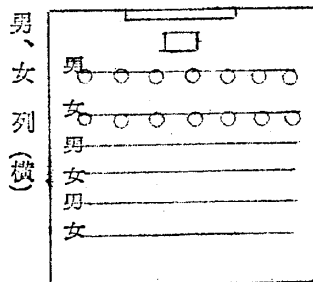
乱暴なんです。「それからちよいちよいいたずらする。」「皆はだまつているの。先生ならいな。N君は借りるときは、よくつても返すときが乱暴だし、けちつけるのなら借りる必要がないんじゃない、というね」「だが先生そんなこといつたけち臭いと言われるし。いやだね。」「それから先生M君とても騒がしいの授業中。」「私も時折注意すると、そのときだけ前を向くが、まもなく忘れて後ろにいるO君や、N君らと、話しをしたりするんです。」「先生W君の隣りはいやです。なんだか気が悪くて。」「それはどういうこと。」「先生授業中1人ごとを時折いうの。それから……あの……へをするの。」「Wのことについては、前からそのような話は気づいていた。その原因は、1年のときでも、その様な事があつたのだろう。1度ぐらい、いつも真実がすると彼だという具合にされるのだからまた身体的にも欠陥があるので、人が馬鹿にし、それに輪をかけて、小学時代から学力不振となり来たものと思われるので、「そんなことはあるもんか。それはお前らの憶測にしか、すぎないんじゃないか。じゃそういう事実があつたかね。」と問うと皆笑つた。言つた子も「だつて」というのだ。「それから後ろにいるC君は、先生年中後ろをみてるよ。」「先生目が悪いらしいよ。」「Cは4月の身体検査のときに、異常が認められ、メガネをかけることを進めたが、席は座高、身長を考慮したため後ろにいき、その折私からも「C君よ、お前目が悪いのだし、メガネかけるまで、もつと前の方がいいんじゃない」というと「先生いゝです。」というのみだつたが、しかし女生徒達からも授業中先生方が黒板に字を書いたとき、読めず後ろの生徒のノートをいちいちみるということを知り、これではなんとかしなければと思つた。そこで、「この次のホームルームのときでも、みんなで話し合い、決めましょう。」と話す。「先生、みんなで話し合つても、とうてい、結論もでずだし、決まりつこないです。だれもN君のそばにはいきたがらないな。すると結局話し合つても無理です。」「先生が決めてくれれば、文句があつても、しぶしぶと従います。」そのとき私の頭の中に浮かんだことはそのまま私自身が座席をお前はここ、だれはそこと決めれば簡単ですむが、いつも考え、そして話し合えと口をすつぱくしていつてきたことが無意味になつてしまう。いつも自己本位に走りがちな年齢の子であれば、いろいろな問題についても、始めの話し合いは、宙に浮いた様で、カラ回りであるが、ときに1つのヒントが具体的事実を重視し、主観的思考を客観的思考にさせ、解決への糸口をつくるきつかけともなる。だが、この問題がうまく解決するとは思わなかつた。幾人かの女子の話を、そのままホームルームにて伝言するより、その話の中に出て来た問題となるNについては、前もつて個人指導をなした。いたずらすることを認めそのことがいけないことで、ついしてしまうのだということ聞き、気をつけますということ席を一番前にしてくれるれば、私自身もきおつけるでしょうとさえいつた。個人指導も終り、いよいよ本質である座席の件についてホームルームの問題とした。「座席を変えて下さいという声があるのですが、座席を変更した方がよいと思う人は、手を上げて下さい。」という過半数以上であつた。「では、なぜ変える必要があるのですか。」と問うと「先生、おれは窓ぎわで、今はいいけど夏になると暑いから、真中辺がいいや。」「そんなのねえや、おれは、窓ぎわがいいな。」すると皆が笑つた。「Cの奴、外が見えるからな。」「おれも窓ぎわがいいや」とM君で言い出した。「先生、N君のとなりはいやです。」と普段発言の少ないO君まで発言した。Nはふんがいて、「いやだら皆おれの処からどけばいゝんだ。」ということになりそれに次ぐ個人批判まで飛び出して来た。そこで私は黒板に大きく現在の座席配置図を書いた。その上個人批判を含め

のまで考慮にして、「座席を変更することは必要なんだね。じや席は今のままで1週間交代で席が
行し窓ぎわの人は、次の週は北極行とするんだね。」という皆、賛成ですといつた。しかし一部
は「おれは窓ぎわだけがいや」という者もいた。「先生1週間交代だけではだめです。座席の配
もしないと。」といいた。黒板にもう1つの空席の図をかき、希望を聞き入れた。それでも、
いろいろ問題があつたが、幾人かが折り合つて決まつた。体の悪いC君も、少しではあるが、前に
た。もつと前に出そうとしたが、いやだといつてあまり前に出なかつた。他にも騒がしいM君、O
いたずらで、ちやめなN君も、皆が前に出ることを認め、自分からも前を希望したので一番前と
まつた。これで一応座席のことは1学期も無事に過ぎ、2学期の10月頃になると、また座席のこ
が、女子のIあたりから出た。1学期も、先生が1度、授業中の学習態度で怒つてから、よくなつ
が、またこの頃たるんできて、男子ばかりか、女子の一部の者さえ教科の先生をみては、授業中騒
のだという声をきいた。そのことは、その教科担任からも、「お宅の級は、くずですね。その上ま
めさが欠けてるから、注意して下さい。」と忠告をうけたのである。勿論私は、怒る前にホームル
ムの問題として、とりあげ論議した。反省させた。とくに名指しを、受けた子については、自分の
利益のみならず、集団生活の規律ということでも話した。「M君は、授業中出歩くことが、あるんだ
つてね。」「うん。」「M君それはいいことかい。」「わりいよ。」「先生、もう出歩かねえ。」「何に
出歩くの。」「わかんねえからさ。それにあの先生あんまり怒んねえし、怒つてもおつかなくねえ。」「
怒るんだろう。」「怒つてもおつかなくねえ、おれなんか、いつも怒られてら。」とO君などのけ
けといふのだ。Iなど前から2番目なのに「先生うるさくて授業になりません。」というのと、後の
から「おれの方など前や真中で騒いでるからてんでわかりません。」「先生も、1人でしゃべつて
ので。」という声のでた。その話の内より、改める点は、改め、いろいろ討議した結果「他人には、
怒るをかけない。」ということを決めしつかりやつていくことになり、最後に私の説教じみた怒つた
で話したのだから以後この様な問題はなかつた。しかしIの声からもこの頃この学習態度も、たる
できたらしく座席のことも考え直す必要をかんじ、ホームルームのとき問題としてとり上げた。授
は3時30分に終り帰りのホームルームから始まつて、皆が帰るまで6時近くまでかかつても、満
な結論は得られなくても、今では苦情も少なくなりよいように思える。そこで座席を変えるべきか
したら、やつと変更論が通りどの機に配置するかについては、激しい論争がなされた。その1例
みると「騒がしくて勉強が、できないというが、騒がしい人に反省してもらい、席は変えるべきで
ない。席を変えても、騒ぐ人はどこにいつても騒ぐのだし同じだ。」「むしろ席を変えるよりも、
学習態度の改善について話し合うことが先決問題だ。」「しかしそういうけれど、席を変えれば、学
環境も変わり話し合い手も、なくなるのではないか。」「前の方で騒がしいO、M、H、N君など
は、反省してもらい、また出歩くC君、K君など自分の座席から離れない。また女子のHさんも授
中他の教科を勉強したり後の人と話をしないこと。」「…いろいろと話し合いがなされた。票決によ
り座席変更になつたが、どこにいきたいということになりきまらず、先生ということでは、とつさ
思ひついた3つの案を提案した。その3つの案とは

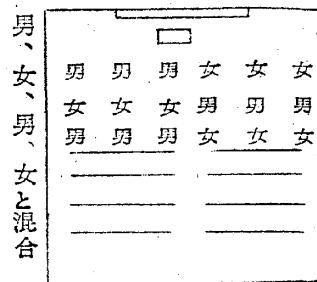
A 案



B 案



C 案



である。いずれの案についても、もめた。A案は現状と同じである。たゞ前後の入れかえのみだ。B案は男子側の圧倒的の反対にあつた。C案は一層強い反対が男子によつてなされた。しかし男女の協力などということを考えに入れると結構ではないかなどと話してみると反対の理由は、前後が女子でははずかしいということにあつた。そこで、3年2組では、B案の通りですよと話す。「でもなあ」といつて恥じらつていた。結局B、C案どちらでもという声がかかり、先生に一任ということなので不本意ながら時間も時間であつたので、希望の場所を聞き大きな配地図に名を書き入れていつた。何度も消したり書いたりした。「先生Nさんの隣り以外ならどこでもいいです。」など希望意見は出た。NやO、M、Hは「先生、僕らはほうほうに分散して結構です。むしろC案かB案でいいです。話をするのに不都合でいいです。」というのを聞き反対論も一度に陰をひそめた。「それから、先生は一番前ですが、そんなに小さくないので、うしろの人が迷惑です。」「騒ぐのが迷惑だぞ。」との言つたのを後のC君があじつた。座席はC案のとおりになり1学期にも話に出た目の悪いC君が一番前、耳の悪いS、Kは3番目に出てきた。Oは真中に配置換えした。坐席の問題は、いろいろの問題を含んでいた。生徒間の誤解もあり偏見もあり強情もあり、服従的あり、建設的意見もある。その1つ1つをとりあげることは困難であるが、大局的には、歩み寄り近づき共同のために努めようとしているのであるとき折男子が女子に教わり教えている様子を見るのである。教師は男女協力の一層の発展のために、意図的にも協力の場をつくるべきである。その場へ全員が参加できなくとも、その困気はやがて教師なくとも生まれてくるようになる。意図的計画でなした座席列の対抗パレーの合をした。その列には男女3~4人ずつ入つていたので協力なくしては、出来ない。全員参加ではなかつたが、それに参加した男子が、やがて1カ月経たこの間のこと、先生方が出張で不在のとき、補教も割り当たらないで外で自由ということになり遊んでいたが、始めは男子は、ソフトをしていてやがて教室よりふと校庭をみると男女協力してパレーをしているではないか。すると私の心の中に自然と歡喜が湧ちてきた。しかし、未だ満足のものでもないし多くの問題を残している。

みんな一緒に明かるいホームルームを

中学校の教育は、とかく高校入試にそなえて、ガムシヤラなどと言い過ぎるかも知れないが、識の詰め込み主義の傾向が強い。そこで育成された子供は、物識りであるが、考えることに乏しい。ここで、生活するホームルームを1つの社会とみると、1人1人自覚を持ち、仲間とともに、伸び

ことのできる人間をつくる必要がある。私の話すことは、子供達に一応理解し受け取られても、
 が真に理解したものか、どうかには、疑いもある。融和も、協同も、生徒自からの手で強化し、
 の問題に対し解決していく力を養いたい。それには、いつも彼らの間に起つている問題を知る必
 がある。職員会議の伝達のみならず、学級の問題を知るには、彼らと遊ぶことであり話し合うこ
 である。遊ぶことの中には、敵のない話も聞けるし、彼らの要求も知れるし、真の姿をみせてくれ
 話し合いは集団での話し合いと個人的話し合いがある。集団的話し合いは、交友関係の理解を助
 個人的話し合いは、個人的な問題の解決をなす上に大切な役割を果たす。集団の中にうずもれが
 個人指導については、ホームルームノートを各自に作製させ、時折、提出させている。その内
 まったく自由で感想、批判、随想、等バラエティに富んでいる。その内には、私の知らなかつ
 子供の悩み、が、多く見出される。家庭のことは、父母と連絡したり個人指導をしたりする。学級
 問題は、その学級に原因が、あるから内容により選別し全体の話し合いの材料として、取り上げる。
 上げないものについても、時間のゆるす限り批評を書きそえるようにしており、勿論個人的な
 のについては、個人指導にまわしている。カウンセリングも、より多くの回数をもちたいしホーム
 ルームノートも、くわしくみたいが、時間にしばられるという欠点がある。そこで、せめても、ホー
 ルームの時間に全体的なことを取りあげ、話し合いをさせ自分を知り、他人を知り、集団の中に適
 向上していくことの尊さを考えさせたい。話し合いのときすべてに自由な発言をということだが、
 はむずかしい。活発な発言が、決してよいものではないこともある。宙に浮いた議論や実践に結
 かない議論は、流水に等しい。少しの生徒の発言でも、その発言は、すべての心の中にしみ込み、
 の心を動かさしめるからだ。集団の中での個人を認識しながら、いつも力を合わせ明かるく楽しい
 ルームをつくるような雰囲気を作り出すようにしなければならぬと思う。私はこゝに集団指
 導ということの難かしさを知り読んだ先生方の教えと批判を請い願うしたいです。

参考資料

霜田 静志	問題児の心理と事例研究	黎明書房
菅坂 哲文	ホームルームの指導記録	明治書院

講 評

研究所 南 木 宏

のたび岡田先生が、H・Rにおける生徒指導の重要性を認識されて鋭意事に当られ、その記録を
 せられた事に対してまず敬意を表します。

Rづくり、学級づくりは現在の学校教育において、最も重要な事であると思います。それは学
 育が学級、H・Rという1つのまとまり、児童生徒の集団を対象として進められ、その集団に対す
 指導は特別教育活動ばかりでなく、教科活動の基礎ともなる重要なものだからです。しかし現実に
 学級、H・Rとは名ばかりであり、その実態は優勝劣敗のみにくい競馬場の如くであつたり、ボス支配
 であつたりして、教育活動の基盤となる真に学級、H・Rと呼ぶのにはふさわしくないものが
 りあるのではないかと思います。この現実に「ある学級」を「あるべき学級」に引きあげていく
 が、学級づくり、H・Rづくりでは大切であると思います。

先生が、HR内の個人的行為によつておきた問題をHR共同の問題として取り上げ、共同責任としてこれの解決を図つたことは、非常に賢明な方法であり、正しい方法だと思います。このような場合には常に問題を提起した生徒について正しい理解をもつていなければなりません。そしてその理解に立つて指導する場合にも、常に生徒が如何なる反応を示すかに注意しなければいけないし、さらにその反応により今後の指導を考えなければならぬと思います。この点音楽教室の机にきずをつけた事件について、朝のとおり音楽教室に座らせて犯人？をみつけ出した方法は、果して最良の方法であつたかどうか？犯人？はこのときどう感じ、今後どうしようとしたか？やはり一考する余地があるように思います。

S君の家への共同奉仕はよい結果をもたらしたと思いますが、こうした事を決定し実行に移すまでの「話し合い」の様子をさらにこまかく記してほしかつたと思います。ここに書かれた程度の話合いで簡単にきまつてしまつたとは思われませんが、実践記録としては、1人の生徒の発言もおちなくその場の様子もくわしく記していただければ、さらに良いと思います。

座席の決定ということも、生徒にとつては教師が考えている以上に大きな問題であるので、先生が独断でやらずに生徒の意見をじゆうぶんにきいて納得してくでやつたことは賢明であつたと思います。こうした場合、生徒の要求を聞き入れるとともに、教師の側においても、生徒の性格、身体的条件、交友関係、学習成績等あらゆる観点からの信念ある「案」を内に持つて話し合いのうちにそのように導くことも必要であると思います。注意しなければならぬことは、それをおしつけてはならないということでしょう。

HRにおける集団指導が、いつもコントロール・ガイダンスであつたら、それは昔の修身に近いものになってしまうでしょう。HRにおける集団指導はちょうど「いもごち」のようなものがよいと思います。いもはいも同志で洗われるのであり、桶の中に入れていもをまわす棒によつて洗われるのではありません。これと同様に教師の手によつて生徒が磨かれ向上されるのではなく、生徒は生徒同志で磨かれ向上することが、のぞましいのであり、先生がそのような指導方法をとつておられることは、非常によろこばしく思います。

先生が今後もさらに研究を進められ、できれば、心理学の領域などからも歩を進められることを希望して講評いたします。